

## 第10回 既成概念と固定観念と技術革新

和合館工学舎 学舎長 今西肇

### 1. 既成概念と固定観念

広辞苑によると、既成概念とは、「広く社会で認められ、通用している概念」、固定観念とは、「心の中にこり固まっていて、他人の意見や周りの状況によって変化せず、行動を規定するような観念」とあります。くだけた表現をすると、固定観念は「個人の思い込み」として主観的であり、既成概念は「社会の思い込み」として客観的です。既成概念は行動や考え方の指針として役に立ちますが、たよりきっていると進歩がありません。「こうなんだから、こうに決まっている」という考え方の罫から抜け出せないと、新しいことは生まれません。しかし、今まで慣れ親しんだことを、一旦無にして次を考えることはとても勇気のいることです。

### 2. 技術革新(イノベーション)

Wikipediaによると、イノベーション (innovation) とは、「物事の「新機軸」「新結合」「新しい切り口」「新しい捉え方」「新しい活用法」(を創造する行為) のこと。一般には新しい技術の発明を指すという意味に誤認されることが多いが、それだけでなく新しいアイデアから社会的意義のある新たな価値を創造し、社会的に大きな変化をもたらす自発的な人・組織・社会の幅広い変革を意味する。つまり、それまでのモノ・仕組みなどに対して全く新しい技術や考え方を取り入れて新たな価値を生み出して社会的に大きな変化を起こすことを指す。」とあります。

語源的には、アメリカの経済学者シュンペーターのいうイノベーションの新しい訳語として登場し、使われ始めたことばです。発明 (invention) や技術進歩 (Technological progress) と区別して、それらが工業化される社会的過程をさす用語として使われています。

日本語の技術革新という訳語は、高度経済成長に向けて1956年(昭和31)の『経済白書』で、イノベーションに「技術革新」という訳語を使ったのが最初です。

技術革新を起こすためには、既成概念や固定観念を一度捨てて、本質を見極める必要があります。

### 3. 地域建設業における三つのイノベーションとは

現在の日本社会には、人という財産がたくさんあります。伝統文化が息づくこの国には、年月というとても大切な財産もあります。

地域建設業の中にも、100年企業が多くあり、その理念 (Philosophy) は継承されています。

このような建設業で起こるイノベーションには3つの種類あります。

#### (1) 組織文化の革新

建設業は、一品生産、現地生産のプロジェクトです。常に現場を持っています。会社組織は、プロジェクトを効率よく実施するために、環境を整えなければなりません。働き方改革と生産性向上のトレードオフを解消するための組織文化の革新が求められます。

#### (2) 技術文化の革新

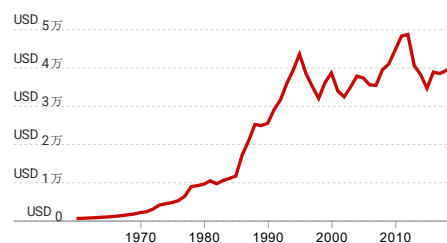
i-construction に象徴される、建設業のDX化が加速しています。経験と勘から、データとICTへ、大きく舵を切りました。

#### (3) 社会連関構造の革新

建設分野はもともとと公益的な仕事が多くありました。それが社会の変化とともに細分化され民への委託となり現在に至っています。地域建設会社の本質は公益事業による社会貢献です。PPP・PFIによる国や自治体と連携するための、社会連関構造の革新が始まっています。

三つのイノベーションは、固定観念や既成概念から解放された地域の建設会社にもたらされるでしょう。市民に愛される地域の建設業の未来が見えてきます。

日本の1人あたりの国内総生産



情報提供元: datacatalog.worldbank.org (Data Commons 経由)